ロータリーを楽しみ、ロータリーを好きになろう

海南東ロータリークラブ

Kainan East Rotary

DISTRICT 2640 CLUB WEEKLY BULLETIN

CREATE AWARENESS
TAKE ACTION

意識を喚起し ──

進んで行動を

2000－2001年度
国際ロータリーのテーマ

RI会長
フランクJ・デブリン
第2640地区ガバナー
水田　博史

事務所　海南市日方1294
〒642-0002 海南商工会議所内
TEL (073)483－0801
FAX (073)483－2266
例会日　毎週月曜日　12時30分
♣第１例会のみ 18時30分
於　商工会議所４Ｆ
会長　平尾寧章　幹事　谷脇良樹
SAA　中尾享平
会報委員会　◎土岐啓次郎
○口井健司
上中嗣郎　奥村匡敏　田中丈士
藤山信也　吉川博之　吉野　稔

四つのテスト

①真実か　どうか
②みんなに公平か
③好意と友情を深めるか
④みんなのためになるか　どうか

第1217回　例　会　2001年（平成13年）１月29日（月）
午後12時30分　於　海南商工会議所４Ｆ

1．開　会　点鐘　平尾　寧章　会長
2．国歌斉唱　「君が代」
3．ロータリーソング　「それでこそロータリー」
4．お客様のご紹介　海南ＲＣ　地区委員
5．ビジター紹介　ロータリー情報　規定委員長
上芝　孝充様
6．出席報告　会員総数　69名　出席者数　53名
出席率　79,10％　前回修正出席率　85,07％
7．会長スピーチ　平尾　寧章　会長

橋本憲紹さんがネパールより無事帰国されました。ご苦労様でした。２ヶ月前ＩＭ２組のガバナー補佐を引受けましてロータリーの勉強をしなければと考え手続要覧やロータリーの友を読み出したのですが、ロータリーなるものが霧の中にあるようで全く見えて来ないのでした。

昨年12月20日頃、今日卓話お願いしています海南ＲＣの上芝孝充さんより兵庫地区の深川パストガバナーの月信を頂きました。ロータリーの歴史や本質を解り易く書かれていまして、何回も読み返しているところです。

霧の中のロータリーが何となく見えてくる感じがしてきましたのです。

今月はロータリー理解推進月間であります。地区情報委員長の上芝さんより有益なお話しが聞けるのを楽しみにしています。

8．幹事報告
○メーキャップ
1/24　中尾　公彦君（和歌山西ＲＣ）
1/25　〃　（和歌山東ＲＣ）
○例会臨時変更のお知らせ
和歌山西ＲＣ　２月14日（水）→２月14日（水）
ＰＭ12:30～ 住友金属工業（株）

9．委員会報告
○世界社会奉仕委員会より
3290地区の３つのＲＣとのバザーの交換が出来ました。

E-mail：rotary@kankyo.co.jp
URL：http://www.kankyo.co.jp/rotary/kainan-east

10. ゲスト卓話　海南ＲＣ　地区委員
ロータリー情報　規定委員長　上芝　孝充様

今、国際ロータリーも日本のロータリーも大変な危機感を持っていますが、中味が少し違うように思います。大まかに分けますと、ＲＩの方は会員数の減少による危機感、日本は会員数の減少もありますが、これでいいのかロータリーと言うことではないかと思います。

来年４月にシカゴで規定審議会が開催されます。案件はまだ届いていませんが、はっきりと解っているのは、世界で200のクラブを限度として、今の定款・細則と違ってもよいクラブを認めようというもので、これはＲＩ理事会からの提案です。例会開催数、職業分類、その他ロータリーの根幹に関わる所が違っても良いというのは、ロータリーの崩壊に繋がるのではないかと思われます。その他、40歳未満の会員だけとか、必ず女性会員を入れなければいけないとか、の案件も出されるのではないかと取り沙汰されています。これらは会員数減少による危機感の現れではないかと思います。

一方、日本のロータリーはといいますと、長引く不況による会員数の減少ということもありますが、果してそれだけだろうかという意見、現状のロータリーでよいのだろうかという意見があります。どういうことかといいますと、ロータリーというのは何なんだろうという根幹のところではないかと思います。

四人で作ったロータリーは今や120万近い会員を持ち、日本に於いても1920年に出来た東京クラブから2300近いクラブが誕生しています。数字の上では順調に拡大・発展をしていると言うことになるのですが、なぜ疑問符のついた意見が出てくるのかという端的な例は、あるクラブの会合で、ベテランの会員が「職業奉仕は」と話し出すと若い会員から「そんな難しい話は抜きにして、まぁ飲みねぇ」とくる、という嘆きの投書が友に掲載されていました。また、Ｉ　ｓｅｒｖｅとかＷｅ　ｓｅｒｖｅの是非は別にして、このことについて意見を言える会員が一体何人いるんだろうか、といったロータリーの本質を心得た会員が少なくなってきているのではないか、相次ぐ増強・拡大の中で会員教育が疎かになっているのではないかという憂いの気持ちが、これでいいのかロータリーと言われているのではないかと思います。

私の立場は情報を提供するもので、教訓めいた話をする立場にはありません。地球上にある国の数だけ正義があると言われていますが、そういう意味からすると120万近い考えがあって然るべきとも言えるのではないかと思いますが、一度クラブでロータリーとは何なんだろう、奉仕団体なのか、例会は人生の修養道場と言われているように人を育てる場なのか、綱領に示された四大部門の奉仕とはどういうものなのか、といったことについてクラブフォーラムを開いて頂ければ大変有り難く思います。

1905年２月23日、弁護士のポール・ハリスは一業一会員を原則とするクラブを作ろうと、石炭商のシルベスター・シール、洋服屋のハイラム・ショーレー、鉱山技師のガスターバス・ローアの四人で、シカゴのディア・ボーン街ユニティービル711号室ローアの事務所に集まったのがロータリーの創立記念日とされているのは御承知の通りであります。

ロータリーの友には、当時の経済恐慌で人心の荒れすさんだ状況を憂えてと美化されたところがありますが、1935年だったと思いますが、ポール・ハリスが来日したときに誰かが「あなたは何故ロータリーを作ったのですか」という問いに「友達が欲しかったから」と答えたそうで、他の三人も遠く故郷を離れてシカゴに出てきた人達でしたから、ここらが真相ではないかと思われます。

当時は二週間に一度の会合で、三回目の会合でシルベスター・シールを初代会長として役員人事が決められ、クラブ名をシカゴ・ロータリークラブ、例会出席の励行として連続４回欠席した者は会員資格を失う、又その時にシールが石炭業界の話しをしたのが卓話の慣例として定着したと言われています。

こうしてロータリーは名実ともに各自の職場を例会場としてスタートしたのですが、６回目の会合でチャールズ・Ａニュートンが遅刻をしたので皆が非難をしたところ、腹が減ったので食事をしてきたとのことだったので、それから皆で食事をしようとホテルやレスト

ランで例会が持たれるようになったようです。

1906年になってクラブの定款・細則が決められ、綱領として二箇条が定められました。第一は、会員の業務上の利益を振興すること。第二は、社交クラブに伴う親睦その他望ましい諸点を振興すること。つまり、会員の相互扶助(互恵主義)と親睦が中心で、統計委員会なるものが設けられ、出欠や会員間の取引が克明に記録されたようであります。これが1912年廃止に至る中でロータリーが変貌していく姿が見られます。

二代目会長アル・ホワイトの時、会員のフレデリック・トゥイードが友人のドナルド・カーターに入会を勧めたところ、主旨を聞いたカーターは「自分たちだけが良いといった社会性のないクラブは長続きしない」と即座に断ったと言われています。

当時は簡単に入会出来ないことが大きな魅力であり、入会を勧めれば誰しもが二つ返事で承諾することが当然と思われていただけに、この入会拒否事件はクラブに少なからぬショックを与えたようであります。ポール・ハリスは絶好のチャンスと捉えたのか、綱領を改正することを条件に再考を促したところ、彼も快く入会を了承したようです。

この事件で三番目の綱領が加えられました。シカゴ市の利益を推進し、市民の中に市に対する誇りと忠誠の精神を普及すること、というもので、ここに漠然とした奉仕の概念が生まれてきたように思われます。

三代目の会長ポール・ハリスの時には、社会的な奉仕を推進しようという人達と、今まで通り相互扶助と親睦だけでよいという人の間で対立が起こり、例会ごとに侃々諤々の議論が戦わされたようですが、議論に疲れ果て雰囲気が冷たくなったときに「諸君、歌でも歌おう」とハリー・ラグルスが言ったのがロータリーソングの始まりで、このことにより友愛心を取り戻しその後の活動に繋がったと言われています。また、シカゴ市に何が必要かということで、社会奉仕の第一号と言われている公衆トイレが三年がかりで他の団体も巻き込んで作られました。

1910年には、16のクラブによって第一回の全米ロータリー連合会が開催されました。初代会長はロータリーの設計者ポール・ハリス、幹事はその後ＲＩの事務総長を含め32年間務めたロータリーの建設者と言われるチェスリー・ペリー、もう一人この大会に出席出来なかったが、「経営の科学とは奉仕の科学のことをいう、すなわち、奉仕に徹するものに最大の利益あり」というメッセージを託したアーサー・Ｆ・シェルドン。翌11年の大会では「ロータリークラブの中に於いて成すべき事がひとつある、それは直ちに行動を起こすことである。自己のために入会した者は間違った会員であり、ロータリーは自己のためではない。ミネアポリス・クラブが創立以来一貫して採ってきた原則は、奉仕だ　自己ではない」と発表したフランクリン・コリンズ、こうした人の登場によってロータリーは多少の矛盾を抱えながらも奉仕の方向に進んでいったようであります。

今、申し上げたことは御承知のように「最もよく奉仕する者は最も多く報いられる」「奉仕だ 自己ではない(Service not self)はあまりに自己否定が強すぎるということで、その後、日本語訳では「超我の奉仕」と言われるロータリーのふたつのモットーであります。

1910年代の米国では、小児麻痺が多発し、それによる障害が大きな社会問題になっていたようです。この救済活動にクラブとして最初に取り組んだのはニューヨークのシラキューズＲＣと言われていますが、この問題に個人で取り組んでいたエドガー・アレンという方が、1918年オハイオ州エリリアにロータリークラブが設立されるのを聞き、人道的な慈善事業を推進するにはロータリーこそ格好の場だと考え、活動の推進を条件に入会したようであります。

ポール・ハリスも「彼はそういう特殊な目的を持って入会を申し込んだ、続けて、その運動の本拠にロータリーを選んだことはロータリーにとって多大な名誉であったと言わざるを得ない」と、自著「This Rotarian Age」の中で述懐していますので、当時はポール・ハリスもこの事業を支持していたと思われます。

入会したエドガー・アレンは早速行動を開始し、他のクラブにも積極的に事業の推進を働きかけたため、全米のクラブに広がり競い合うような奉仕活動に発展していったようで

ありますが、この奉仕活動のあり方を巡ってロータリーが分裂するのではないかという大論争に発展していくわけであります。

それは簡単に申しますと、個人奉仕か団体奉仕か、さらには多額の金銭的支出を伴うクラブの団体奉仕をロータリーの社会奉仕として認めるのか否か、と言う問題であります。ＲＩも一時は年間１ドルの特別人頭分担金を取って事業の推進に充てようとしたのですが、反対勢力も強く、代表的な意見のひとつに「障害児を援助するのに反対する人は誰もいません、しかし、我々が決定すべき問題をＲＩが決めることに多くの人達が反対するのです」というクラブの自治権の問題もあったようです。

結局この問題は、1923年のセントルイス大会でテネシー州のナッシュビル・ロータリークラブのウイル・メーニアと、時のシカゴクラブ会長ウイリアム・ウエストバーグによって起案された決議第34、通常決議23－34によって一応の解決が図られたわけであります。

決議23－34は手続要覧の社会奉仕部門に、社会奉仕に関する1923年の声明として掲載されていますが、聞いたことはあっても全文を読まれた方は少ないのではないかと思います。まだの方には是非ご一読をお奨めします。

この23－34は、五つの原則と七つの準則から成っており、原則には利己と利他の調和を図ることとか、ロータリーは単なる心構えではなく奉仕する者は行動しなければならないといったことが書かれています。準則の最後には、「クラブがひとかたまりになって行動するだけで足りるような事業よりも広くすべてのロータリアンの個々の力を動員するものの方がロータリーの精神により適っていると言える。それは、ロータリークラブでの社会奉仕活動は、ロータリークラブの会員に奉仕の訓練を施すために考えられたいわば研究室の実験としてのみこれを見るべきである」と書かれています。ここのところが、日本で言われるところのＩ ｓｅｒｖｅの根拠であり、ロータリーは人を育て、その手段として奉仕活動があるといわれる所以であります。

さらに申し上げれば、例えば会員数50名のクラブが団体奉仕をすれば、一度にひとつのニーズにしか対応出来ず他のニーズは置き去りにされますが、一人ひとりのロータリアンが個人奉仕をすれば、50通りのニーズに対応出来るのであります。

このように個人奉仕の方が団体奉仕よりもはるかに大きな仕事を成し得る可能性があるとも言えるわけで、申し上げたように米山梅吉翁は「ロータリークラブは奉仕クラブではない、ロータリアンが奉仕をするのであって、クラブは奉仕するロータリアンを育てるところである。従って、ロータリーの例会は人生の修養道場である」と喝破されたわけであります。

実は、この決議23－34を削除しようという動きがＲＩの中にあり、確か1983年版の手続要覧から消えたことがあります。このことにより日本のロータリーの中でＩ ｓｅｒｖｅかＷｅ ｓｅｒｖｅの議論が盛んに行われたことがありました。

私もこの問題についてはよく解らなかったのですが、その後公式訪問においでになった中島ＰＧがこの問題に触れられ「Ｗｅの中にＩを埋没させてはならない」とおっしゃられた一言でよく理解が出来た経験があります。

私は前年度までロータリー財団の資金集めの担当をしていました。この財団もロータリーは寄付団体かとか、Ｗｅ ｓｅｒｖｅではないのかと批判の対象になることもありました。批判する人の多くは財団のプログラムを知らないし、知ろうともしない方ではないかと思います。プログラムをよく知って頂くと世界理解と平和に多大な貢献をしていることが解って頂けるし、知るということは「Ｗｅの中にＩを埋没させない」ことであり、ロータリアンとしての思いやる心を発揮出来るところでもありますので、地区目標の200＄くらいは他でしまつしてでも寄付して頂けるのではないかと思います。財団委員長の援護射撃みたいになりましたが、申し上げたいのは、ロータリアンとしては創立時からロータリーが成人に達したとも言われる23年頃までを理解しておく必要があるのではないかということ。ロータリーの中には色々な考え、意見がありますが、その中で自己を確立しておくということ、又クラブの中での自身の存在感といいますか、存在価値といいますか、そういうものを常に意識しておくことが大切ではないかというふうに

思います。

最近ロータリーの中で、論題を上げて議論をする機会がめっきり減ってきたと言われています。人を育てるということは、こうした機会の積み重ねが大切ではないかと思います。

私は最近59－60年度のＲＩ会長ハロルド・トーマスの著書「ロータリー・モザイク」を読みました。この中からロータリーの先達の言葉を紹介したいと思います。

ＲＩ第二代会長グレン・Ｃ・ミード「私の考え方は、ロータリークラブは主として個々の会員の全般に亘る啓発のためにある」

第四代会長フランク・マホランド「ロータリーの目的は、各個人の中に奉仕する能力を発達させるにある」

チェスリー・ペリー事務総長「ロータリーの偉大な機能は、各個人を個人として、一般社会の一員として、各個人が所属する他の組織の一員として、より良き奉仕が出来るように訓練するにある」

そして、トーマス自身は「ロータリアン達の間に正しいロータリーの理解を深めることの必要性は、今日でもこの運動の最も切実な必要事項のひとつである」と述べておられます。

このように、ロータリーは初期の段階から個人の資質の向上を図り、職場や業界団体、さらには地域社会に於いてその能力を発揮するよう鼓舞してまいりました。
ここのところが、Ｎｏｔ Ｉ ｓｅｒｖｅ Ｂｕｔ Ｗｅ ｓｅｒｖｅをモットーとするライオンズクラブとの決定的な違いであるはずが、いつの間にか奉仕一点張りになってきているのではないかという感じがしないではありません。

第六代会長アーチ・Ｃ・クランフは「すべては主としてクラブ会長の手にあるのだ、クラブ会長が指導力を発揮しないならば、すべては徒労に帰するのだ」と述べておられますが、どうか会長のリーダーシップのもとで、新しい世紀のロータリーはどうあるべきかについて論議を深めて頂ければ誠に有り難く存じます。

最後になりましたが、会員皆様の益々のご健勝とクラブのご隆盛を祈願して終らせて戴きます。

11. 次回例会ご案内

平成13年２月12日(月)　休会
平成13年２月19日(月)
ＰＭ12:30～ 於　海南商工会議所４Ｆ
会員卓話　橋本憲紹君

12. 閉　会　　点　鐘

ニコニコ・米山・ＢＯＸ

上芝　孝充様	本日はお招き頂きありがとうございました
柳瀬　恵司君	結婚記念日１月１日と去年も言われましたが、１月１日はあまり結婚しないと思います。本当は１月26日です。
平尾　寧章君	上芝さん卓話ありがとうございました
山名　正一君	上芝さん卓話ご苦労様です
ＩＭ２組	ＩＭ２組の新年会の打上げの残金です
谷脇　良樹君	新年夫婦例会の賞金です
岩井　克次君	新年夫婦例会の賞金です
橋本　憲紹君	高野山真言宗伝道大会の副委員長、無事務める事が出来ました
中尾　享平君	先週休みました 山本さんありがとうございました